

時代に流され福井へ チャレンジ精神旺盛な ペルー人ママの子育て

大山ノリさん

ペルー共和国リマ出身。

高校卒業後に家族で来日。いろいろな仕事を経験し、現在は保険会社に勤務。ペルーの文化を大切にしながら3人の子どもを育てる母親でもある。子どもの誕生日には子どもの同級生や家族を集めて、得意なケーキや料理の腕を振るう。在日30年以上の経験と子育ての考え方を聞く。



明るい笑顔でインタビューを受けるノリさん

— 福井に来たきっかけは？

ペルーで高校を卒業して、1991年に来日しました。当時フジモリ大統領の時代のペルーはテロが多くて、危険な状況だったからです。突然学校が爆破されたり、爆発で家が停電したりすることもありました。それで、両親がペルーは危険だと感じて、父の姉が沖縄にいたので日本に来ました。でも、沖縄で迷惑をかけるのも悪いですし、当時日系人の出稼ぎブームだったこともあって、日本全国で仕事を探しました。そして、家族4人全員で一緒に暮らせるということで、福井にやってきました。

— 福井で始まった生活について

はじめは、家族4人さえいれば寂しくないと思っていましたが、私と同世代の友だちがいないのは寂しかったです。今みたいなデジタル社会ではなかったもので、ペルーの友だちと連絡をとるにも、長い時間がかかりました。手紙を出しても何週間もかかるんです。

最初の仕事は、南条の織物会社でした。外国人が誰もいない環境の中で、職場の人たちはみんな親切で、遊びに連れて行ってくれたり、ご飯をご馳走してくれたり、とても良い関係を築けました。

働き始めて4年目のときに転機が訪れました。鯖江で世界体操選手権が開催された際、私もボランティアとして参加しました。そこで、ブラジル人やスペイン人の選手の通訳などをしていたんですが、これをキッ

カケに仕事を辞めました。元々何かを学び続けたい、挑戦したいという性格だったのもあり、織物の会社で同じ仕事をし続けることに、どこか不自由さを感じていたのかもしれませんが。

その後は、いろいろなアルバイトを経験しました。どんな仕事をしていても、何か新しいことを学びたいと思いながら働いていました。

— 出産を機に生活は変わりましたか？

1人目の子どもが産まれた後、いつもの「学びたい気持ち」が湧き上がってきたので、ペルーに帰って調理の学校で2年間学びました。ペルーで調理の仕事をするにはよかったんですが、再び日本に戻ってきました。というのも、私の祖父はスペイン語が話せないのに、ペルーでレストランを経営していて、その姿に憧れがあったんです。だから、私も、日本でペルー料理のお店を開きたいと思って、福井に戻ってきました(笑)。



子どもたちとのホームパーティの様子。ケーキなどはノリさんの手作り。

— 現在はどのようなお仕事を？

子どもの進学など金銭面で状況が変わったので、生活も子ども優先になってきました。その当時好きだった調理のパートも辞めて、給料の良い工場勤務に変えたんですが、コロナの影響で工場の契約は終了してしまいました。

現在は、ママ友に紹介してもらった保険会社で営業として働いています。

— ご家族について

子どもは3人で、皆スポーツとか趣味とか個性は様々です。私はペルーでの学生時代、テロでやりたいことができなかつたので、子どもたちには好きなことをやらせてあげたいと考えていますね。

家庭では基本はスペイン語なんですが、難しい言葉は子どもたちが分からないので、日本語とスペイン語のミックスで会話しています。長男にスペイン語でメールを送ると、返事は日本語で返ってくるみたいな感じです。私が怒る時は、自然とスペイン語になってしまいます(笑)。

子どものスペイン語に関しては、兄弟の中で次男が一番上手です。私の両親と同居しているんですが、例えばニュースを見ていて、祖父が日本語が分からない時は、次男がスペイン語で説明してくれます。子どもたちはスペイン語を理解でき、スペイン語圏に留学した際には困らないと思うので、日本語とスペイン語の両方を学ばせて良かったと思います。

— 日本とペルーの文化で子育て

両方の国の文化を大切にしています。長男が小さかったころは、誕生日になると公民館を貸し切りにして友だちやその親を呼んで100人規模のパーティーを開きました。そのパーティーのケーキやお菓子は、ほとんど私の手作りで、ピニャータ（南米のお菓子が入ったくす玉人形）も準備しました。日本人の子には珍しい文化で、とても楽しんでくれました。

いつも思うんですが、日本人は誕生日を家族だけで祝って、葬式になると県外から親戚や知り合いがたくさんやってきますよね。生きてるときに会わずに、亡くなってから会いに来るのは不思議です。

— よく聞かれることは？

保険、年金、学費などを聞かれることが多いですね。制度が外国とは違うので、外国人からすると難しいんです。あとは、医療や不動産のことも相談されます。新築で家を買う外国人も増えてきています。

私も新築で家を建てたのですが、契約書の日本語をよく理解しないまま急いで購入したので、アフターサービスなどの対応があんまり良くなって、今ではかなり後悔しています。

私が外国人なので、不動産側も軽くしか説明しないんですよ。家の購入を考えている外国人には、いろいろな会社を見て、説明もしっかり理解してから買うように勧めています。



福井国際フェスティバルに参加して、ペルーの文化を説明する様子

— 外国人が病院で困ること

「この病院の先生が良くなかった」、「具合が良くなならない」など、病院や病気の話もよく聞きます。自国と比べて日本の医療設備は良いんですが、先生の対応などが不安なんです。

病院だと日本語の壁もあります。＊コロナ前は通訳も診療室に入れたんですが、今は電話越しでの通訳になるので、日本語が出来ない外国人にとっては不便なんです。（※インタビュー当時）

生活面で相談を受ける際は、経験をもとにアドバイスしますが、私の意見を押しつけるのではなく、あくまで決定するのは相談者側であることをいつも意識しています。

— 地域の方とのつながりは？

私は地域の婦人会や子ども会には参加するようにしています。外国人の中には、会費などを払いたくないという理由で参加しない人が多いみたいですね。

また、越前市で働く外国人の中には、土日出勤や夜勤が多く、地域の活動に参加したくても参加できない人もいます。

地域の側が、そういったことも理解して、お互いに歩み寄って、ちゃんと意見を伝えれば交流も増えていくはずなんです。外国人が日本で家を建てたら、自国に帰るつもりはないということですから、できるだけ地域と仲良くできるといいですね。

インタビュー日：2021年4月10日



誕生日パーティの様子

— 昔と比べて生活はどうか？

現在では、市役所や学校に通訳がいるので、外国人にとってすごく便利になっていると思います。30年前は、まるでサバイバル。自分で何でも調べないと生活できないから、日本語や日本の制度についてたくさん勉強しました。そのおかげで、今は日本語が話せるようになったんだと思います。

昔は、外国人が珍しかったから顔をじっと見られることもありました。その都度「こんにちは」と笑顔で返していましたが、今の日本ではそんなことも減って、外国人への理解が高まっていると思います。

◎ふくい外国人コミュニティリーダーとは？

「外国人県民が安心して暮らせる福井」を目指し、外国人県民等のネットワークを活かし、県内の外国人コミュニティに生活・災害情報を届けたり、日本人県民とのコミュニケーションの橋渡しや災害時の自助・共助等の担い手としてご活躍いただいています。詳しくはこちら⇒

